介護老人福祉施設におけるライフストーリーブック作成の取り組み

鳩間亜紀子[1]　星野真理子[2]　栗田　祐介[3]

(2013年9月30日受付，2013年12月18日受理)

The creation of the life story book in a nursing home for the elderly

Akiko HATOMA[1]　Mariko HOSHINO[2]　Yusuke KURITA[3]

(Received: September 30. 2013, Accepted: December 18. 2013)

要　旨

本稿は，介護老人福祉施設において行われた，ライフストーリーブック作成の取り組みについて報告するものである。ライフストーリーブックを作成した介護職員2名に対しインタビュー調査を行った結果，職員の変化として，《利用者についての理解や親しみが深まる》，《家族と関わることの意義を認識できる》，《介護職としての自覚や意欲につながる》が見いだされ，高齢者の理解を深める効果が認められた。

キーワード：ライフストーリーブック，高齢者の理解，介護人材の育成

Abstract

This paper reports the process of creation of life story books in a nursing home for the elderly. To explore the effect, unstructured interview were conducted with two care workers who created life story books of the elderly in nursing homes. As a result, it was found that when care workers created the life story book, (1) an understanding about the elderly and familiarity deepened, (2) they can recognize the meaning of being concerned with their family, and (3) it was connected with the consciousness and volition as a care worker.

Key Words: life story book, understanding of the elderly, training and education for care workers

Ⅰ．はじめに

1．介護人材に求められている倫理

介護福祉士養成課程における教育内容等が見直され，厚生労働省社会・援護局長通知（2008）（以下「指針」）によって2009年度より新カリキュラムが適用された．厚生労働省（2008）が示した教育内容の見直しの背景の一つに，介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会（2006）の「求められる介護福祉士像」があり，介護サービスにおける中心的役割を担える人材の人材養成における目標として12項目が示された．これらは，指針の「資格取得時の介護福祉士養成の目標」や「領域の目的」にもその内容が反映されている．12項目に含まれている「尊厳を支えるケアの実践」，「心理的・社会的支援の重視」，「『個別ケア』の実践」，「高い倫理性の保持」等や，「資格取得時の介護福祉士養成の目標」において「他者に共感でき，相手の立場に立って考えられる姿勢を身につける」が冒頭に掲げられていることからも，介護福祉士を中心とする介護人材には，尊厳をもった，全人的な利用者の理解が求められている．

1　高知県立大学社会福祉学部社会福祉学科・講師・修士（社会福祉学）
Department of Social Welfare, Faculty of Social Welfare, University of Kochi, Lecturer (Master of Social Welfare)
2　社会福祉法人希清軒傳六会彦三きらく園・副施設長
Nursing home for the Elderly Hikoso Kirakuen, Assistant Facilities Manager
3　社会福祉法人北須磨保育センター友が丘YUAI・生活相談員
Special Nursing home for the Elderly Tomogaoka YUAI, Residential Social Worker

2．高齢者の理解を深めるための取り組み

利用者理解を目的に高齢者の生活史や思い出を聞き取る取り組みが，介護福祉教育及び介護現場において実施されている．村上ら（2000）は，介護福祉を学ぶ学生の「利用者理解を促進させるためのプログラム」として，学生自身の自分史作成から介護実習で利用者にインタビューするまでの指導実践を報告した．尾台（2006）は，学生が介護福祉実習において受け持ちの利用者とともに，ライフレビューブックの作成を行うことを試みた．いずれも学生自身の変化を実証的に分析するものではないが，学生の利用者理解を深める効果が示唆されている．

原ら（2006）は，介護老人保健施設の利用者が昔の暮らし等を話すライフストーリー面談を実施し，その面談を行ったケアスタッフにインタビューを行った結果，ケアスタッフの認識の変化を明らかにした．武分（2005）は，介護療養型医療施設で実施したメモリーノート作成過程と，職員に行ったアンケート結果から，職員に高齢者の理解と信頼関係の構築という効果があったとした．

尾台の「ライフレビューブック」や，武分の「メモリーノート」は，幼少期・青年期・成人期・老年期ごとに語られた学校生活や仕事・職業・家事といったエピソードや思い出を書きまとめたものである．写真やイラスト等を添える場合もあり，作成方法に厳密なルールが設定されているものではなく，名称や方法等は実践者によって異なる[1]．

高齢者に対して行うライフレビューについては，Haight ら（1995）の Life Review and Experiencing Form（LREF）の66項目を用いた，高齢者自身への効果が実証的に明らかにされつつあり[2]，その語りを聴く者にも利用者理解を深める効果があることが実践的に示唆されている．

そこで本稿では，高齢者施設において実際に行われた「ライフストーリーブック」作成の取り組みについて報告する．作成した介護職員に対しインタビュー調査を行い，利用者理解の効果を検討することを目的とする．

なお，本稿では高齢者の生活歴をまとめたものを「ライフストーリーブック」（以下「LS ブック」）と表記することとした[3]．

Ⅱ．K 施設における LS ブック作成の概要

1．作成の経緯

北陸地方にある K 介護老人福祉施設（以下「K 施設」）において，LS ブックが作成された．イギリスの高齢者施設を視察した職員が，現地で説明を受けた LS ブックを研修報告会で紹介したことがきっかけとなり，職員の自発的な作成実績もあった．2012年４月，上司より介護職員２名に対し LS ブック作成の打診があり，実施されることとなった．作成過程は表１，作成者と LS ブック対象者の基本属性は表２のとおり．LS ブック対象者の選定や作成方法・内容は，作成者２名が相談しながらインターネットで回想法を参照する等して行われた．対象者選定にあたっては，施設から家族へ依頼し，承諾が得られた．家族へ質問用紙を送付した後の聞き取りは，家族が面会に来た際に，詳細や補足の内容が聞き取られた．家族から得られた内容は生活史として記述的にまとめられ（約1,100～4,500字），LS ブック作成が着手された．

表１　LS ブック作成の過程

（2012年４月）
・上司より介護職員２名へ LS ブック作成について説明。
（　〃　８月）
・各自担当している利用者の中から，対象者を選定。
・家族宛の依頼文作成・郵送。（家族との交流の機会をもてず，聞き取り用紙を作成することとなった）
（　〃　10月上旬）
・聞き取り用紙作成。
・C 氏家族面会時に，聞き取り用紙へ記入を依頼し，後日回収。D 氏家族から生活歴に関する書き起こしメモの持参あり。
（　〃　10月中旬～11月上旬）
・聞き取り終了と生活史の作成。
・C 氏家族面会時に，写真提供の依頼，補足質問，LS ブックの必要物品購入の承諾。D 氏家族に面談日を設定し，同様の対応。
（　〃　11～2013年１月）
・生活史をもとに，LS ブック作成。
（2013年１月）
・LS ブック完成。家族への公表。
（　〃　２月）
・特養内フロア職員へ活動内容の報告と LS ブック公表。

表２　LS ブック作成者と対象者の基本属性

職員	年齢	性別	資格	勤務経験	LS ブック対象者
A 介護職員	21	女性	ヘルパー２級	３年	C 氏： 92歳・女性・要介護５（Ⅳ）
B 介護職員	21	女性	介護福祉士	入職すぐ	D 氏：106歳・女性・要介護５（Ⅳ）

職員，LS ブック対象者共に，LS ブック作成当時
LS ブック対象者の基本属性は，年齢・性別・要介護度（認知症高齢者の日常生活自立度判定基準）

２．LS ブックの内容

事前に家族へ送付し記載を求めた質問用紙の内容は，幼少期から学童期（家族構成，住んでいた場所・家，子ども・学生時代のエピソード），青年期（仕事，生活習慣，結婚・出産・育児，生活環境，家族・友人の思い出），壮年期（その後の生活，定年・退職後），K 施設に入所してから（家族と利用者との関わりや利用者への思い等），自由記入欄（他の思い出等）だった．これらの内容に加え，作成者が気になったことなど聞き取った内容が記された．また，家族から提供された写真や，作成者による似顔絵やイラスト等，色使いにも配慮しつつ，B ４版のスケッチブックにまとめられた．図１，２に，作成された LS ブックの一部を示した．

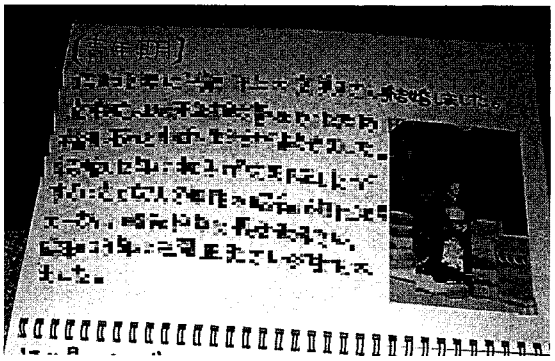

図１　LS ブック（青年期）

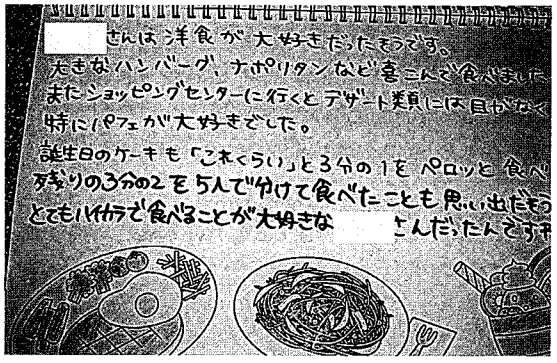

図２　LS ブック（食の好み）

Ⅲ．LS ブック作成の効果

１．調査方法

LS ブックの作成を行った介護職員２名に対しインタビュー調査を行った．互いに相談しながら LS ブックを作成した経緯があることも考慮し，両名に単独と合同のどちらが良いかを確認した上で，合同で行った．質問は，作成の経緯を振り返りながら，作成にあたっての動機や感想，作成後の変化，作成した LS ブックの活用方法，今後の取り組みについての意向を中心とし，時間はおよそ１時間半だった．インタビューの内容は，調査対象者の許可を得て録音し，逐語録を作成した．逐語録は，発話の内容ごとに要約を行い，職員の変化として認められる内容に絞り込み，類似するものを整理しカテゴリーを生成した．本稿では，カテゴリーを《　》，サブカテゴリーを〈　〉で示した．

２．倫理的配慮

調査対象者が所属する施設代表者宛に，調査目的，方法に加え，回答の内容をもって個人が特定されないこと，研究目的以外で調査結果を使用しないことを明記した依頼文書を送付し，実施の承諾を得た．インタビュー調査開始前に，口頭で依頼文と同様の説明を行い，同意を得た．また，LS ブックの画像の掲載については，個人が特定できないよう加工を施した上で，施設を通して家族へ本稿についての説明とあわせ掲載の確認を依頼し，承諾を得た．本調査実施にあたっては，高知県立大学社会福祉研究個人情報保護・倫理審査委員会の承認を得た．

なお，K 施設が実施した LS ブック作成につい

ては，LSブックの対象となる利用者に認知症があることも考慮し，家族の承諾を得た上で，家族のみから聞き取りが行われた．

3．調査結果

LSブック作成によって，作成者にどのような変化があったかを表3に示した．《利用者についての理解や親しみが深まる》，《家族と関わることの意義を認識できる》，《介護職としての自覚や意欲につながる》の3つのカテゴリーが生成された．

（1）利用者についての理解や親しみが深まる

5つのサブカテゴリーで構成された．LSブックを作成することで，利用者の過去の様子に触れ〈新たな情報を得る〉ことができ，アセスメント表に記されているような断片的な情報も〈様々なエピソードから理解を深める〉ことができる．利用者の過去を知ることで，声かけの話題となり〈会

表3　LSブック作成による介護職員の変化

カテゴリー	サブカテゴリー	発話の例
利用者についての理解や親しみが深まる	新たな情報を得る	・自分の知らなかったこととかも，いっぱい聞きましたし。自分も知っていたけれども，さらに付け加えて，「そうだったんだ」っていう詳しい内容も知ることができたので良かったなと思っています。
	様々なエピソードから理解を深める	・家での本人さんと犬との関わりですとか。（飼っていた犬が）いつ亡くなってその後，辛そうにしていたっていう話を聞くことができたので。 ・いろんなエピソードがあると思うので。そこの詳しいところまで知れたのは大きいかな。
	会話のバリエーションが広がる	・後はやっぱり過去を知ることで，会話，あまりちゃんとした会話ができない方なんですけれども，「こんなこともあったの？」とか声をかける時の話題にもなったなって思いますね。
	利用者の反応の違いを感じる	・ブックを作り始めるときくらいには「はい」とかしか喋らなくなっていたんで。前に戻ったっていうか，近づいた感じがして嬉しかったですね。
	家族のような関わりができる	・ただの利用者と介護職員という関係よりも，家族とか，愛情っていう…。違うのかもしれないですけど…。親しみを持って接した方が，話し方次第では相手にも伝るのかなっていう思いもあるので。
家族と関わることの意義を認識できる	関わることが楽しい	・最初，私，家族さんとの関わりが全然なかったので，話を聞くっていう中で家族さんとのコミュニケーションが取れて，その方の知らなかったことも知ることができて，すごい楽しかったというか。
	家族の感情を理解する	・直接，家族さんとか利用者さんとかに話を聞いた方が，自分自身の中にちゃんと入ってくるっていうか。感情もわかるって言うか。
	直接，家族から話を聞く	・作り始めたけれども，やっぱり最後までちゃんと作りたいというか，作っていく中で家族さんとの関わりもすごく大切だなっていうのも思ったので。
	家族と一緒に利用者のことを話す	・私にとっては介助させて頂いている利用者さんの1人であって，家族さんにしたらお母さんという存在なので。そういう関係で家族さんと一緒に利用者さんのことをお話できる機会っていいなって思いましたね。
介護職としての自覚や意欲につながる	利用者と関わることの意味を認識する	・（LSブックの作成は）実際に利用者さんと直接関わる自分たちがしなくちゃいけないこと。完成品をただ見て，「ああ，こんな方だったんだ」って思いをするのと，作っていく中での家族さんとの関わりも含めた自分の感じ方とかも，結構，違ってくるっていうか。
	もっと良い介護を考える	・すごいお洒落だったって話を聞いて，今までパジャマで過ごすことが多かったんですけれど，着替えさせてあげた方が喜ぶんじゃないかとか，そういうところまで考えられるようになった。
	しっかりケアしてあげたいと思う	・作る前は，ここにいる利用者様という感じだったんですけれども。家族さんと関わりを持ったりすると，家族っていう感じではないかもしれないですけれど，その方のことを結構知ることができて，しっかりケアしてあげたいなっていうような気持ちになって。

話のバリエーションが広がる〉ことにつながった．また，入所当初と比較し発語が減った利用者の状態変化を知る作成者は，LSブック作成後の働きかけにより，利用者の反応が入所当初の状態に戻ったような〈利用者の反応の違いを感じる〉ことで，「近づいた感じ」がしたと語った．家族から利用者の過去の様子を聞き取り，利用者への働きかけが変化する中で，親しみのある〈家族のような関わりができる〉ことが語られた．

（2）家族と関わることの意義を認識できる

4つのサブカテゴリーで構成された．LSブック対象者は認知症があり，過去の様子は家族からの聞き取りが中心だった．聞き取りを通してコミュニケーションを重ね〈家族と関わることが楽しい〉ことや，直接聞き取ることで〈家族の感情を理解する〉ことができ，〈直接，家族から話を聞く〉ことの重要性が再確認された．さらに，〈家族と一緒に利用者のことを話す〉ことが，利用者－家族－職員の3者の関係を深めている様子が語られた．

（3）介護職としての自覚や意欲につながる

3つのサブカテゴリーで構成された．利用者に一番近い存在として〈利用者と関わることの意味を認識する〉ことができ，〈もっと良い介護を考える〉ことやその変化を自己認識できたこと，家族との関わりを重ねることで〈しっかりケアしてあげたいと思う〉といった，介護職としての自覚や意欲につながっている様子が語られた．

Ⅳ．考察

1．利用者理解に関する効果

LSブックを作成した介護職員の変化として，《利用者についての理解や親しみが深まる》，《家族と関わることの意義を認識できる》，《介護職としての自覚や意欲につながる》が見いだされた．

ライフストーリー面談実施によるケアスタッフの高齢者およびケアに対する認識の変化を明らかにした原ら（2006）の研究結果，及び，グループ回想法を実施したケアスタッフへの効果を調べた内野ら（2011）の研究結果と照らし合わせた．原らは，「《その人がよくわかる》」，「《その人への関心が高まる》」，「《関わることの楽しさ・喜びを実感する》」，及び内野らは「【対象に合わせた高齢者ケア方法の工夫】の〈高齢者の理解が高まったこと〉」を明らかにしており，これら項目から，本研究の《利用者についての理解や親しみが深まる》に共通するサブカテゴリーや内容を確認できた．

さらに，原らの「《自信が深まる》」，「《丁寧な関わりになる》」，及び内野らの「【ケア場面での自分自身の変化】〈仕事や回想法への意欲を高める工夫〉」は，本研究の《介護職としての自覚や意欲につながる》と類似する内容が多かった．

先行研究におけるLSブック等の作成については，高齢者本人への聞き取りによるものが多く，そのためLSブック作成者の変化として家族と関わることに焦点があてられたカテゴリーは見当たらなかった．本研究で取り上げたLSブック作成の事例は，LSブックの対象者が認知症高齢者（認知症高齢者の日常生活自立度判定基準：Ⅳ）であったため，介護職員が家族に対して生活歴の聞き取りを行ったものである．LSブックを作成した介護職員は，利用者の家族への聞き取りの機会を重ねることで，利用者の過去の様子を詳しく知るだけでなく，家族の感情にも共感し，利用者理解を深めていると推察される．

稲田ら（2010）は，グループホーム介護職員の認知症高齢者の生活歴把握の現状を調査し，生活歴を把握している介護職員が認知症高齢者に対し肯定的な感情を抱く傾向を明らかにしている．家族への聞き取りを通して行うLSブックの作成は，利用者の生活歴を知ることで利用者への《利用者についての理解や親しみが深まる》ことと《家族と関わることの意義を認識できる》ことを通し，利用者への共感的な理解を深め，《介護職としての自覚や意欲につながる》効果があると考えられる．

2．高齢者施設におけるLSブック作成の課題

入所施設では，アセスメント表に記された情報以外にも，入所後のふだんの利用者の様子や家族との会話から知り得る情報もある．しかし実際には，認知症によってコミュニケーションが困難な場合や，家族が施設を訪ねても利用者への面会のみで帰ってしまう場合もあり，利用者の生活歴を十分に知るためには，あらかじめ設定した場や利用者・家族との同意・協力が必須となる．

また，稲田らの調査では，グループホーム介護職員が「認知症高齢者の生活歴把握の必要性は理解しているが，実際の現場では十分な把握ができていない」ことが示されており，介護職員の多忙さが要因となっていることが推察できる．本研究におけるLSブックを作成した介護職員も，本来業務の時間外に作成作業を進めており，個々の職員にかかる負担を回避する導入方法が求められる．この点について河合ら（2013）は，今後の課題として学生や中高年者の聞き書きボランティアや傾聴ボランティアの活用に触れているが，本研究の結果では〈利用者と関わることの意味を認識する〉の例として，LSブックの作成は「実際に利用者さんと直接関わる自分たちがしなくちゃいけないこと」と認識された．介護職員がLSブックを作成することが理想的と言えるだろうが，現実的には人員体制や本来業務との兼ね合いを考慮しなければならない．LSブック作成の効果は，高齢者にもたらすものと，作成する側にもたらすものが認められている点からも，作成の目的に応じて作成担当者を検討する必要がある．

インタビュー調査においては，LSブックの活用方法も課題として指摘された．実際に作成した職員には，利用者理解の効果があったと考えられるが，LSブックを作成していない他の職員にも還元できるものでなければ，複数・多職種の職員が関わる介護現場においては，効果として弱い印象が否めない．個人情報の取り扱いの観点も含め，施設内業務の一部としてLSブック作成をどのように取り込めるかが検討課題といえる．

介護人材の確保は現在，社会的な問題となっており，最低限の職員配置で施設利用者の生活を任される介護職員の負担は大きい．現場で受け入れやすい作成方法（いつ，誰が，どのようにして作るのか），及び，活用方法（利用者や家族との対応でどのように活用するのか，どのようにして作成者以外の職員に効果を還元するのか）については，今後も検討を重ねる必要がある．

本稿をまとめるにあたり，施設利用者・家族の皆様，施設職員の皆様にご協力いただきました．心からお礼申し上げます．

注

1）実用化を図るものとして，作成方法の手順や書式等をまとめた志村ら（2005）の実績がある．志村和恵・萩原裕子・下山久之・他（2005）「ライフレビューブック－高齢者の語りの本づくり」弘文堂．

2）例えば，河合らは特別養護老人ホームの利用者にライフレビュー及びライフストーリーブック作成プログラムを実施し，介入群・対照群を比較することで，プログラムが虚弱な高齢者の心理的QOLを向上させるのに効果があったことを実証している．河合千恵子・新名正弥・高橋龍太郎（2013）「虚弱な高齢者を対象とした心理的QOL向上のためのライフレビューとライフストーリーブック作成プログラムの効果」『老年社会科学』35(1)，39-48.

3）「ライフストーリー（ブック）」以外にも，「ライフレビュー（ブック）」や「メモリーノート」といった名称があり，K施設の作成者は，「ライフヒストリー」としていた．本研究では，ライフヒストリー，ライフストーリー，ライフレビュー，回想法等の違いを検討することはせず，高齢者の生活歴を聞き取り書き起こすツールとして，「ライフストーリーブック」に統一した．

文献

遠藤清江（2008）「介護福祉士実習教育における倫理教育の課題－学生の実習自己評価と倫理観について－」『京都女子大学生活福祉学科紀要』

Haight, B.K. and Coleman, P. and Lord, K.（1995） The Linchpins of a Successful Life Review: Structure, *Evaluation, and Individuality, The Art and Science of Reminiscing: Theory, Research, Methods, and Applications,* Taylor & Francis.

原　祥子・小野光美・沼本教子・ほか「介護老人保健施設利用者のライフストーリーをケアスタッフが聴き取ることの意味－ケアスタッフの高齢者およびケアに対する認識の変化に焦点を当てて－」『老年看護学』11(1)，21-29.

稲田弘子・渡邊一平・栗栖照雄（2010）「認知症高齢者施設における生活歴把握と介護職員の利用者への感情・思いの現状と両者の関連」『介護福祉学』17(1)，66-75.

介護福祉士のあり方及びその養成プロセスの見直し等に関する検討会（2006）「これからの介護を支える人材について－新しい介護福祉士の養成と生涯を通じた能力開発に向けて－」

厚生労働省（2008）「介護福祉士養成課程における教育内容等の見直しについて(案)」(http://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/hukushi_kaigo/seikatsuhogo/shakai-kaigo-yousei/index.html，2013.9.25).

厚生労働省社会・援護局長通知（2008）「社会福祉士養成施設及び介護福祉士養成施設の設置及び運営に係る指針について」(平成20年3月28日社援発第0328001号)

村上　信・三富道子・伊藤　桜（2000）「利用者理解を促進するための実習指導プログラム－人権や人間の尊厳を大切にする視点から－」『介護福祉学』7(1)，125-134.

尾台安子（2006）「ライフレビューブック作成による利用者理解の効果」『松本短期大学研究紀要』15，15-26.

武分祥子「介護療養型医療施設における『メモリーノート』作成の効果と課題－高齢者理解を目指して－」『介護福祉学』12(1)，54-62.

占部尊士（2009）「介護福祉実習における学生の意識変化に関する研究－第Ⅰ段階介護福祉実習前後での検討－」『介護福祉学』13(2)，216-228.